

船乗り・画家・発明家

アレキサンドル・モジャイスキーの芸術的・科学的遺産

コンスタンチン・グーバー

アレキサンドル・モジャイスキーは1825年3月21日、バルト海沿岸の港町ロチェンサルムで一家の長男として生まれた。彼の父親は海軍将校で、当時艦長を務めていたが、6年後にはアルハンゲリスク港司令官に任命された。この頃一家は合わせて5人の子供に恵まれていた。

1835年、モジャイスキーは10歳でサンクトペテルブルクの海軍士官学校に入学した。こうして彼は最初の学校教育を受けることになったが、1701年ピョートル大帝によって開設されたこの学校は、ロシアの上級学校としては最も古いものの一つだった。現在も、ピョートル大帝ゆかりの海軍の高級施設として残っている。モジャイスキー在学中は、イワン・クルーゼンシュテルン提督が校長だった。航海家としても有名なクルーゼンシュテルンは、当時のロシアの大科学者たちを教師として招いた。その結果、この学校の教育レベルは非常に高かった。モジャイスキーを教えた教師はすべて、モジャイスキーがまず数学で、次に絵画で優れた能力を持っていることに気づいた。モジャイスキーは16歳でこの学校を卒業し、バルチック艦隊で海軍勤務を始めた。

最初の数年間はバルト海での帆船上の勤務で、1849年には大尉に昇任した。



図1 「アレキサンドル・モジャイスキー」
(ロシア海軍中央博物館所蔵)

1853年初頭、モジャイスキーはフリゲート帆船ディアナ号の乗組員として世界周航に旅立った。ディアナ号はロシアの主力海軍基地クロンシュタットを出航し、まずはコペンハーゲンに向かった。それから、大西洋を横断してリオ・デ・ジャネイロに寄港した。

ディアナ号に写真機は持ち込まれていなかったが、同じくクロンシュタットから出航したプチャーチン提督のフリゲート艦パルラダ号には、写真機が1台あったことが事実として知られている。(後にプチャーチンが部下とともにこのディアナ号で日本に着いたのは周知の通りである。) プチャーチン使節団に秘書官として随行した有名なロシアの作家イワン・ゴンチャロフは、写真撮影の様子をその小説「フレガート『パルラダ』号」の中で描写している。ゴンチャロフのユーモアあふれる記述から、この写真機はそれほど上等なものではなく、これを使って作成されたネガの質も良くなかったであろう

ことがうかがえる。写真は余りにも不鮮明で、我々の時代まで伝わらなかった。

ロシア海軍は世界一周の重要な航海の際には、画家を随行させて世界各地の主要な出来事を記録し、民俗学・人類学的資料を収集していたが、ディアナ号には専門の画家は乗船していなかった。そこでホーン岬を越えた頃、モジャイスキー大尉が絵を描くようになった。そして、これが彼を有名にする最大の所以となった。

モジャイスキーの作品の大多数は、現在、サンクトペテルブルグのロシア海軍中央博物館に収蔵されている。このほか、失われたものや個人所蔵になっているという情報のあるものがあり、偽造品も見つかっている。

海軍中央博物館には25の作品が収められており、そのうち22点にはモジャイスキーの署名がある。作品は一つにまとめられており、題材によりいくつかの作品群に分類されている。



図2 アレキサンドル・モジャイスキー
「若い女たち、年老いた女たち、ひとりの少年」
(ロシア海軍中央博物館所蔵)

第一の作品群は民俗誌的要素を持ったもので、日本の人々の肖像や沿岸部の風景を描いた作品である。興味深いのは、作者が普通の人々の姿を写実的に描いていることである。「若い女たち、年老いた女たち、ひとりの少年」、「少女の肖像」、「小さな兵士」などの作品には庶民的な感覚が見られる。

沿岸各地の風景を描いた作品にも偵察的な要素は全く見られない。モジャイスキーは異国の美しさを表現することに集中している。もちろん、船乗りとしてディアナ号の姿を印象付けようとした絵もある。「下田港のフリゲート艦ディアナ号」には、作品の右下隅に、座って絵を描いているロシア海軍将校が描かれている。その後ろに若い日本人がいて、作業を注意深く見守っている。こうした細かい描写は、ロシア人画家が旅先で絵を描くときに使った伝統的な技法である。

第二の作品群は、1854年12月、ディアナ号の下田港停泊中に起こった地震に関するものである。このときの大災害でディアナ号は大破した。モジャイスキーはこの悲劇を描かずにはいられなかった。そして、「地震による下田の街の破壊」と「揺れ続ける海」の2作品が残っている。



図3 アレキサンドル・モジャイスキー
「揺れ続ける海」
(ロシア海軍中央博物館所蔵)

モジャイスキーの作品にはプチャーチン使節団の活動を反映したものもある。彼は一将校に過ぎず、日本との交渉には参加していない。しかし、この政治的な使節団の両国にとっての重要性をよく理解していた。交渉期間中ロシア使節団が滞在した場所は今でも訪れることができるが、日露交渉という観点から私にとってより興味深いものの一つは、「交渉での日本側代表団」という集団肖像画である。この絵の下の方にモジャイスキーは出席者全員の名前を記している。

モジャイスキーの芸術的手法を分析するのは本稿の主旨から外れるが、彼の作品の中には美術評論家から高い評価を受けているものもあることに触れておきたい。正確な色使いが特に評価されている。しかし、船乗りとしての経験がこの非職業画家に大いに役立ったことを、我々は確認しておく必要がある。

モジャイスキーが描いた絵のその後の運命について少し触れる。帰国後、彼は絵をロシア海軍の長官に献上した。海軍大将でもあったコンスタンチン・ニコラエビッチ大公は自分の部下であるモジャイスキー大尉の絵を高く評価するとともに、厚くその労をねぎらい、ダイヤモンドの指輪を与えた。これらの絵は海軍水路部の図書館に保管され、後に中央海軍図書館に移された。20世紀半ば、アレキサンドル・モジャイスキーの絵は海軍中央博物館のコレクションに加わった。そのうちの一つ、モジャイスキーの自画像を含む風景画は、現在、博物館を代表する展示物となっている。

フリゲート艦ディアナ号の難破後、モジャイスキーは絵を描くことをやめざるを得なくなった。当時、ロシア人乗組員たちには母国へ帰る船がなかった。そうした不安の中で、モジャイスキーは破壊を免れたディアナ号の図書室からロシア海軍機関誌「モルスコイ・ズボルニク」を見つけた。そこには、スクナー型帆船オピト号の設計図が掲載されていた。これをもとに、新しい船を建造することになり、モジャイスキーがその指揮をとった。船は「戸田号」と命名された。しばらくして、すべてのロシア人乗組員はこの新しい船

で母国に帰った。これはモジャイスキーの大きな功績の一つである。

帰国後の1858年、モジャイスキーはヒワ（中央アジア）の地理学的調査に参加した。しかしこのとき彼が絵を描いたという記録はない。

1860年、モジャイスキーはポリ港に配属されたが、そこでは快速帆船「ヴェストニク号」の建造が行われていた。最初、彼は造船の経験を生かして蒸気エンジンをはじめ船全体の組み立てを指揮し、後にヴェストニク号艦長の座についた。ポリでの経験は蒸気機関の構造、理論、実際の利用法などを学ぶ重要な機会となった。

1862年モジャイスキーは一時退役した。この年に彼は結婚し、ヴォログダ市近郊の妻の邸宅でしばらく過ごした。

それは、この才能あふれる人物にとって新たな生活の一時期であった。そして、アレキサンドル・モジャイスキーは飛行機をつくることを決意した。彼は鳥が飛ぶ様子を観察した。最初に作ったのは凧のようなものだった。次にもう少し大きなものをつくり、自らそれを操縦して2回飛ぶことができた。そして、この実験を通して、飛行機に固定翼とプロペラを使うことを考えついた。

1873年、モジャイスキーは飛行機の最初のモデルの製作に着手した。ヴォログダ近郊にあった彼の邸宅には、現在「モジャイスキー記念博物館」があり、そうした模型のいくつか展示されていて、作業場の様子も再現されている。

1876年、製作した最もよいモデルの実演をサンクトペテルブルクで行った。実演は大成功で、この発明家にさらなる自信を与えた。しかし、本格的な飛行機の創造にはかなりの資金が必要だった。そこで国防省に補助金を申請したところ、それを検討する特別委員会が設けられた。

モジャイスキーは飛行機がどんなものであるかについて、自ら次のように手短かに記述している。「飛行機は、蒸気エンジンと操縦者を収容する艇体、二つの固定翼、尾翼、機頭の大プロペラ、後部の二つの小プロペラ、車輪を備えたカート、飛行機全体を補強し尾部を浮揚させる二本のマストから成る。」

専門家や技術者からは好意的な見解が寄せられたが、特別委員会は補助金を出さないという結論を下した。モジャイスキーは私財を使って飛行機作りを続けようとしたが、ついに資金は底をつき、窮地に陥った。この時、彼はコンスタンチン・ニコラエビッチ大公のことを思い出し、支援を要請した。大公はこのプロジェクトに関心を示し、若干の資金を提供してくれた。そして、後にモジャイスキーは母校の海軍士官学校の教師となった。

1881年11月30日、モジャイスキーは飛行機の特許を取得し、サンクトペテルブルグ近郊で組み立てに着手した。飛行機は翌年の夏に完成の予定だった。その頃彼は海軍少将となっていたが退役し、実験を始めた。

1883年春の実験で、モジャイスキーの飛行機は浮上したがフェンスに激突、翼と主脚部が大破した。

この実験は飛行とは公式に認められず終わった。しかし、我々はモジャイスキーの業績はきわめて大きかったと評価できる。約20年後に行われたライト兄弟の最初の飛行でさえ、たった3秒しか続かず、事故で終わっていることを我々は知っている。

その後数年間、モジャイスキーは飛行機の修復と実験を続けたが、次第に体力は衰えた。1890年4月1日この世を去り、サンクトペテルブルグのスモレンスキー墓地に埋葬された。

彼が作った飛行機は残っていない。しかし、彼が旅先で描いた素晴らしい絵は残っており、人類文化を記憶し、記録するユニークな非文字資料になっている。そして、この傑出した人物—船乗り・画家・発明家—の記憶も生き続けている。